

ピアニスト&ピアノレスナーのための健康講座  
体を知って体を解放しよう (名匠探訪より)

## 連弾をレッスンに取り入れよう

音をよく聴くようになり、音楽性も豊かに育つ!

山崎 裕・ピアノデュオドウオール

ピアノ音楽誌 a magazine for music lovers

# レッスンの友

ピアノの先生方のための **お悩み相談室**

生徒が突然「高校の芸術科を受けたい!」と真剣な顔で……

Interview

青柳いづみこ、鷺見加寿子、高橋多佳子



# 連弾をレッスンに 取り入れよう

音をよく聴くようになり、音楽性も豊かに育つ！

## 「 لندنノススメ 」

音楽の世界は限りなく拡がり続けます



### ピアノデュオ ドウオール

(藤井隆史 & 白水芳枝)

ふじい・たかし&しらみず・よしえ

文責：藤井隆史

「音楽を構築していく楽しさ」  
連弾を一言でいうと何ですか？と訊かれれば、こう答えるでしょうか。

連弾とは、一台のピアノを横に並んで二人で弾くという演奏形態を客観的に見詰め、それぞれの手のバランスをイメージし、楽譜を立体的に読み込んでいく中で、この音楽に四手が必要な意味を探り、自分たちの耳で注意深く聴きながら四手のタッチを意識し、お互いの音楽性、人間性を尊重しつつ、二人ならではの音楽の世界を創り上げること……。

そう！連弾とは、あらゆる感覚と身体の器官を駆使しながら、実に複雑なこ

## 連弾をレッスンに取り入れよう

音をよく聴くようになり、音楽性も豊かに育つ！



宮崎・延岡総合文化センターで

とをしているのです。

「何をどうしたら良いのか分からない！」という先生方も多いかと思いますが、それで普通、ということがお分かりになりますよね。

多くの連弾作品を遺してくれたシューベルト、ブラームスなど多くの作曲家たちは、「誰かと弾きたくて」、作品を後世の僕たちに託してくれました。

このように、何百年経っても変わらぬ、音楽への愛情と人を愛する心、そして初めに述べた技術面のすべてを学んで初めて成り立つ連弾を学ぶのは、音楽そのものを学ぶことであり、音楽の聞こえ方、捉え方までがらりと変わります。

前置きが長くなりました。

僕の経験から、皆様にお伝えできることを言葉にしていきたいと思います。

**まずは二人でピアノの前に座り、大屋根を開けてその景色を眺めてみましょう**

連弾では、二人がどのように座って自分たちの音を聴くのか、冷静に判断することも大切です。

ピアノの前に座り、大屋根（反響板）を開けて、目の前のそれぞれの弦の長さや太さを見てみましょう。

セコンドの左手にあたる低弦は太くて長いから、控え目でよいだろう。プリモ右手のソプラノ部分は、弦も短いから大きな音で弾かなければならないだろう；

…果たしてそうでしょうか？

僕たちは小さい頃に、大雑把に言ってしまうと、「右手はメロディー、左手は伴奏」と教わります。ですが、連弾ではセコンドの左手は、家では言えば上台の部分。しかもその上に三声が積み重なり、左手は音楽の重要な部分である和声感も担っています。それだけで、相応な響きで弾く重要性を意識できます。

ちなみに、ベダルをどこで踏み替えればよいのか分からないという方は、この和声感を感じていらっしやらないことが多いのではないのでしょうか。セコンドの方が、左手の和声に合わせてベダルを踏み替えてみる——そうすれば、濁ることも、作品の土台を見失うこともなくなります。

ただそのベダルも、奏者の性格によって、早く踏み替えてしまう方（僕藤井）、のんびりな方（白水）、また、手を離すのが早かったり、こちらがベダルを踏み替えた時には、相手はもう次のフレーズに向かっていたり、なんてこともありますので、必ずセコンドのベダルのみ＋プリモのメロディー、そこにセコンドの左手



アルバム「SYMPHONIE」の録音風景。ガリバーホール（滋賀県高島市）。

を追加、といったように、ペダルを重視した練習と、お互いの癖を知ること大切です。

僕は連弾ではセコンドが多いのですが、デュオを深く追求すればするほど、ソロの演奏でもバスがしっかり聞こえる演奏に安心感を覚えますし、歌のソプラノの方や、ヴァイオリン、フルートなど高音

を担当する楽器と一緒に演奏する時ほど、左手を意識するとバランスの良いアンサンブルになることを再認識しました。

セコンドの方が一人で練習していると、本当にこのバランスが良いのだろうか？と確信が持てない場合が多いかもしれませんが、思い切って調整してみる心が大切です。それが連弾でのバランスなので、すから、僕の言葉を信じて（！）、気持ち新たに試してみましよう。

四手になった時に、ああこのことかと納得できるはず、です。

セコンド右手はプリモの左手同様、バスとメロディーとの間にある、ソロでは存在しない、香りや色を醸し出し、音楽に彩（いろどり）を与えてくれる貴重な声部。この内声なくして、連弾は成り立ちません。

この二声同士がバランス良く、それぞれの手的位置も考え（二手が重なる箇所は、プリモ左手は上、セコンド右手はその下など）、位置決めをするとういですが、お互いが弾きやすいように楽譜も工夫して、多少は変更し音を取り合い、左手バスの上に二声がうまく乗れば、あと考え

るのは、重要なメロディーを受け持つプリモの右手となります。

では、そのプリモの右手はどうしましょうか。

「あら、バスや和声を意識しなくていいから、メロディーに思いっきり集中できる！」とでも思ってみましよう！そのメロディーは、奏者二人分の想いが詰まった歌、四手を率いる旋律ですから、ソロを弾く以上に、メロディーとしての責任感があります。

但し、目の前に伸びる弦は他の三声より短く、弦の響きの時間も短いので、大きな音ばかりイメージすると、キャンキャンしてしまうものです。

伸びのある良い音で、存在感のあるメロディー・ラインを生み出しましょう。

こんな風に四層を意識し、建築していくように、一声ずつ積み上げて練習をしてみてください。

その四声を聴きながら、今度は音の方向性を見ましよう。大屋根を開けているなら、どちらの方向に四層が向かっているのか。目の前に四声がかっきり見

## 連弾をレッスンに取り入れよう

音をよく聴くようになり、音楽性も豊かに育つ！



えるか。

「音を見る」ということは、僕がデュオを勉強してから知ったことでもありません。

意識して練習を積み重ねれば、ホールで四声になった時も、音の洪水にバニツクに陥らず、それぞれ尊重しながら支え合い、スツキリとしながらも、立体的な演奏になっているのではないかと思います。

### そもそも、指のタッチって？

連弾は、楽器とのデュオ、声楽の方とのリートと同じアンサンブルの領域でありながら、ピアノの音同士になりますので、互いが互いの音を潰し合う危険性があります。そこで四手それぞれのキャラクターを考え、弾き分けたいと思っても、自分のタッチや表現の乏しさに愕然とするものです。

僕は、次の点を意識されることをお勧めします。

いずれの場合も、手首から肩までは楽にして、第一関節（指の付け根の関節）より先のみ緊張させ、指が鍵盤の底にこつんと当たる感覚で。

これは連弾に限らず、ピアノを弾く上で重要な要素だと思います。

●指一本一本の間に糸が見えるかのよう  
なフィンガー・レガート、息継ぎを感じさせるノン・レガート、鍵盤から音を吸い上げるようにして離すスタッカ

ート。この三種類を作りましょう。

●グランドピアノで練習している方は、テヌート、ソステヌートの音色を作るために、鍵盤のアフター・タッチ（鍵盤の底までストンと指を落とし、少し力を抜いたカクンという地点）を狙いましょう。

僕がタッチのことを真剣に考えるようになったのは、デュオを勉強するようになってから。録音して聴いたその音楽が、どの声部も同じ音色に聞こえる寂しい現実を突きつけられてからです。

すぐにはできなくても、意識すること  
で耳を澄ますことを知り、指先の感覚に  
繊細になり、同時に肘や腕の使い方も考  
えるようになりますし、連弾ではロマン  
派、近代の作品も多いですから、フィン  
ガー・レガートを意識するか否かで、表  
現上の幅が変わってくるように思えます。  
例えば同じ和音でも、ただジャン！と  
弾いてしまうのではなく、どのバランス  
なら響きが美しく聞こえるかを考える  
（和音を弾く際には右手左手、それぞれの  
小指を意識するとバランスが良くなりま  
す）、その練習の楽しいこと！



ガリバーホールにて

目に見えないものに「これだ！」と感じた瞬間の幸福感と時間は、自分たちだけのものですよね。

## 連弾作品を数多く残した 作曲家たちの原動力

皆様が多く弾かれ、聴かれることの多

い連弾作品を多く遺した作曲家たちには、モーツァルト、シューベルト、ブラームスが挙げられますが、彼らには一緒に演奏したい誰かがいました。

モーツァルトには姉ナンネル、シューベルトにはシューベルタイアードの仲間たち、ブラームスにはクララ（シューマンの妻でありピアニスト）が。その気持ち、連弾作品を生み出す原動力になったと言えます。

その時代の人々が、どのように音楽を楽しみ、どんな大きさの空間で連弾を弾いていたのか……そんなことに思いを馳せるだけでも、連弾の捉え方が変わってきますませんか？

連弾はお互いを戦わせ、音量や速度を競い合うだけのものではなく、この人と弾きたい！ 音楽を高め合いたい！ という心の顕れではないかと思うのです。

連弾に限らずアンサンブルでは、相手に自分の想いを音で伝えようとしますが、その心は、聴いている方々にも届くようになります。またソロは、自分の責任で、自分のやりたい音楽すべてを再現できる、

ということが最大の魅力ですが、デュオや連弾では相手あつての音楽ですから、練習段階において自分の音楽観を見直し、新しい音楽性を取り入れることもできません。

いわば、パートナーは自分の「先生」になり得るということですね（僕の場合は白水先生が傍らにいる、ということですよ・汗）。

そして生徒さん同士のレッスンでは、是非言葉で、やりたいこと、思っているイメージをお互い話してもらいましょう。全く違うものを心の中で想像し、やりたいことが違えば、なかなか一つの音楽になっけていきません。たった一言で、二人の音楽がぐっと近くなり、もやもやしていたものが解決されたことも、これまでの経験上多いものです。

## 困難を困難と思うか？！

連弾は、違う環境で育った者同士が一つの音楽を作ろうというのですから、難しく当然。

## 連弾をレッスンに取り入れよう

音をよく聴くようになり、音楽性も豊かに育つ！

### ピアノデュオ ドゥオール (藤井隆史&白水芳枝)

2004年にドイツで結成後、国内外で300以上のステージを踏み、ピアノデュオを中心とした活動で高い評価を受けるドゥオール。

藤井隆史は、東京藝術大学附属音楽高等学校、同大学、同大学院(修士時ベゼンドルフアー リサイタル出演)で植田克己、K.シルデ尚氏に師事。現在、東京藝術大学、武蔵野音楽大学非常勤講師。

白水芳枝は、兵庫県立西宮高等学校音楽科、東京藝術大学卒業。笠原春子、井内澄子両氏に師事。現在、国立音楽大学、共立女子大学非常勤講師。

それぞれ文化庁(藤井)、野村財団(白水)、DAAD(デュオ)の奨学生として独・マンハイム音楽大学大学院でR・ベンツ、P・ダン高氏のもとで学び、ソロ科、ピアノデュオ科を最優秀で修了。

各々ソリストとして国際コンクール入賞、東京文化会館他でのソロリサイタル、コンチェルト、NHK、ドイツラジオ・ベルリン出演など数日で活動。

ピアノデュオではロンドン、青山財団バロックザール賞、シューベルト、M.ドラノフなど国際的賞を受賞。

ヨーロッパ各地でデュオ・リサイタルを開催し、日本ではコンサート・ツアー。国内では文化庁芸術祭参加公演、NECガラコンサート、日本演奏連盟クラシックフェスティバルなどに出演した。NHK-BS、FM出演、FM西東京パーソナリティの他、審査にも携わる。

2枚のCD「ドゥオール」『SYMPHONIE』は共に各方面から話題を呼び、2010年の東京でのリサイタル共々、各音楽誌で高い評価を受けるなど、独自の音楽性で今後が益々期待されるピアノデュオである。

公式サイト: [www.yoshie-takashi.com](http://www.yoshie-takashi.com)

公式ブログ: <http://ameblo.jp/yoshie-takashi/>

### ドゥオール 今後の演奏会予定

#### 9月

##### ●ガラコンサート「ABCホームカミングコンサート」

9月16日(金)18時 [大阪] ザ・シンフォニーホール

問合せ: NPO法人 ABC音楽振興会 TEL.06-6453-5340

##### ●コンサート「宝くじランチタイム・コンサート」

9月21日(水)12時 [東京 京橋] 宝くじドリーム館

#### 10月

##### ●リサイタル

10月22日(土)13時半 [愛知・名古屋] 宗次ホール

問合せ: 宗次ホールチケットセンター TEL.052-265-1718

#### 11月

##### ●リサイタル「シリーズ“Pianists No.14”」

11月12日(土)17時 [東京] トップアンホール

問合せ: スピカ TEL.03-3978-6548

#### 12月

##### ●リサイタル「火曜日の音楽サロンVol.20」

12月13日(火)14時

[大阪] 茨木市民総合センター(クリエイトセンター)

主催・問合せ: (財)茨木市文化振興財団 TEL.072-625-3055

生きている人間同士ですから、うまくいかないこともあるし、時間もかかります。兄弟、親子でも、一人ひとりの個性は違いますから、僕たちのように、もとは他人(と言うと白水に怒られますが)の場合は、困難も多いものです。でも、何百年も脈々と受け継がれ、今の世の中にまだ弾かれている楽曲として残っている音楽には、これまでの音楽家

の魂が入っているのですから、僕たちが軽々と弾けてしまうわけがない！僕がいつも自分に言い聞かせている言葉です。僕とピアノデュオとの本格的な出会いは七年前。決して小さな頃から連弾に触れていたわけではありません。でも、ある程度の時間をかけ、ソロを勉強したことで(デュオを始めた頃には、

もういい歳になっていましたね……)、音楽や相手のことを客観的に理解できる年齢になっており、現在の自分があるのかな、と思います。連弾を通して、音楽の世界は限りなく広がります。皆様にも、連弾を是非、お薦めいたします！